

< 解 説 >

青少年のボランティア活動は、全国各地に「体験活動ボランティア活動支援センター」（以下、「支援センター」という。）が設置される以前にも学校の部活動や地域の高校生会等で取り組まれていた。

「支援センター」が設置され、そこにコーディネーターが配置されてから5年が経過し、青少年の活動の場や内容は多様に広がっている。福祉的分野中心の活動から、自然・環境、まちづくり、国際交流・協力、文化・芸術等にかかわる分野へと展開されていることが、毎年全国から寄せられる活動の報告や、広報誌に見てとれる。

ところで、現在の青少年が置かれている状況は全国各地どこも似通っており、子どもたちの健全な育成のために、多様な人や物に触れ、交流し、体験する場が必要になってきている。そこで、コーディネーターは子どもたちがどのようにして様々な人と交流し、いろいろな体験をする場を、どう開拓していけばよいか問われてくる。

活動の場を子どもたちに提供するきっかけは

- 1 「活動したい」（体験・ボランティアニーズ）あるいは、「活動の環境を提供したい」「体験・ボランティアの参加を求めたい」（社会ニーズ）という相談を受ける
- 2 コーディネーターが子どもたちの活動の発展や継続性等を考慮して新たな場を提供したいと思う
- 3 センターの事業として子どもたちに心豊かにたくましく生きる環境を提供したい等が考えられる。

< 1 の観点から >

愛知県にしおボランティア市民活動センターの「車いすダンス」事業では、

- ・福祉関係に進学希望の高校生から「障害者とかかわるボランティア活動をしたい」という相談
- ・大学生から「障害者スポーツボランティアに継続して参加したい」との相談
- ・障害者の施設から「定期的な車いすダンス講習ボランティア」の依頼
- ・車いすダンスサークルから「障害のあるメンバーがボランティアをされる側からする側へ活動の場を広げる」支援をしたいとの希望

そこで、この四つの相談を結び、青少年が障害者とともに活動できる場をコーディネートしたものである。

これは、青少年に活動の場を提供しただけでなく、同時に、障害者自身が車いすダンスを教えるということで、他者の役に立つことができた点に特色がみられる。

< 2 の観点から >

静岡県清水町体験活動・ボランティア活動支援センターでは、学校の総合的な学習の時間で、社会福祉、ボランティア活動について学習し、体験することが増えても、その後、継続して活動を行う場が子どもたちの周りにはない現状をみて、地域に呼びかけ、ボランティア活動を定期的、継続的に行える受け皿を設定できるようにした。その結果、呼応してくれた施設が、児童生徒のボランティア活動の場となった。ねらいを「ボランティアを体験する」場の提供をするという考え方で進めている。ボランティアへの「初めの一歩」を踏み出しやす

くする場づくりに重点を置いている。

群馬県吉岡町生涯学習ボランティア活動支援センターでは、青少年が多くの体験をすることが大切であるという観点から、それまで、教育委員会の事務局員が進めてきた成人式に、周囲からは「公式行事に子どもを参加させるのはいかがなものか」と言われたが、青少年を募集し、「成人式ボランティア」として活動の場を設定した。支援センターが青少年の活動の場を英断して、拓いた例である。

広島県大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センターでは、「中学生の企画によるキャリアアップ講座」を実施したが、これは、コーディネーターが子どもたちの自主的な提案を受け入れたもので、子どもたちの成長を見守るコーディネーターや周囲の大人たちの細やかな配慮が伺える活動の場である。

< 3 の観点から >

静岡県焼津市青少年ボランティア人材バンクは、青少年に体験活動ボランティア活動の機会を与えることをねらって、平成11年に設置された。一方では、市内の公民館等諸団体に活動機会の提供を依頼しておくので、子どもたちはその中から、自分の条件に合ったものを選んで活動に参加している。特に、「乳幼児との触れ合い」は、回数が多く、兄弟姉妹の少ない今の子どもたちにとって貴重な体験の場となっているようである。継続しているので、今後、乳幼児の対応の仕方が深まっていくことが望まれる。

(中根 惇子)